29

近世初期の病理学・治療法
――『古寫本　鍼灸秘書』による考察

戸田　静男・亀　節子

われわれは、本学会において『古寫本　鍼灸秘書』について発表してきた。この医書の前半は、経穴解剖図書であり寄生虫病の鍼灸治療書である。これらに記載されている経穴名にはいわゆる十四経絡上の経穴以外のものも数多くあった。そして、一般的な全身症状に対する治療穴名が記述されていた。また、寄生虫病のような特殊な疾病に対しての有効な穴名も数多く記載されていた。そして、これらの治療法の記載は臨床的といえよう。今回は、この書の後半に記載されている症状や症候、およびその治療法の解説について考察することにより、本邦近世初期の病理学・治療法について考察したので報告する。

最初に、「五臓の熱気」や「五積聚の針」について記述されていた。五臓の熱気を冷やす針の方法は五臓それぞれによって異なっていた。次に、「風の針」および「中風の針」が記述されていた。その多くは経絡にとらわれることのない穴名の記載であった。そして、腹結の有無によって治療方針が異なっていた。「三焦の針」や「五臓の気の針」の記載もあるが、これはいわゆる順気の針治療といえよう。その他、以下のような種々の症状、症候に対する針が記述され、有効な穴名が記載されていた。

それらは、「かっけのはり」、「りんびょうのはり」、「黄疸」、「すはふき」、「はらのほつるやまい」、「血の道めのまうこと」、「なひそん」、「女人けっくわ」、「下風の針」、「難産」、「五臓六腑の寒熱」、「かいそう」、「何とも見へぬ病者」、「肝気」、「心気」、「肺気」、「長い病」、「けつかく」、「へそより上の病」、「へそより下の病」、「げっぷ」、「熱気」、「耳鳴り」、「目まわる」などであった。

以上のような症候、症状に対する針は臓腑経絡の概念にとらわれることなく、実際的、臨床的なものであった。今回、本邦近世初期に著された『古寫本　鍼灸秘書』を考察することで、本邦近世初期の病理学・治療法の概念

およびその時期の医学的状況を知り得た。このようなことから、本書は本邦医学史上意義のあるものと思われる。

（関西鍼灸短期大学）